
大艦巨砲戦争

天照

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大艦巨砲戦争

【Nコード】

N6635I

【作者名】

天照

【あらすじ】

1941年…

アメリカ国務長官コーデル・ハルによって、日本側が最後通牒と受け取るハルノートが突き付けられた。

日本側はこれを拒否、日米間の緊張は一気に高まることとなった。連合艦隊司令長官山本五十六は、秘密裏にハワイ真珠湾への奇襲攻撃を企画する。

『戦艦部隊を中心とするハワイ太平洋艦隊の撃滅』
史実とは異なる真珠湾攻撃

果たしてその結末は…
そしてその後の戦争の行方とは…

決戦前夜…暗夜の航海

波のうねりは穏やかであった。

艦に乗れば、いつもこのうねりが私に生きた心地を感じさせてくれる。

波に揺られて吐き気を催すなど、全くけしからん話だ。

男はそう思いながら艦橋の外の景色を眺めていた。

何が見えるかといえれば何も見えない。

真っ暗な空間の上側に、細やかに煌めく幾千の星々があるだけである。

『ニイタカヤマノボレ二〇八』の打電を大本営より受け、艦隊はひたすらアメリカ太平洋艦隊の停泊地、ハワイオアフ島へと向かっている。

「成功すると思うかね？」

男は口を開いた。

誰とは言わなかったが、それに呼応しある士官が答えた。

「成功させねばなりません。我らが日本国の命運がかかっているのですから。恐れながら、南雲提督自らがそのような事を口にしては、兵の士気に影響します。場合によっては…」

「分かっている。そうかつかするな宇垣。お前は頭が固くて困る。」

この艦隊の指揮官である南雲忠一中将は笑いながらこう言った。

指摘をした宇垣纏少将は渋い顔をしている。

序列の厳しい軍隊において、こんな会話など普通は到底出来なかった。

これが成り立つのも南雲の駆逐艦生活が長かったからだろう。

駆逐艦では、士官、兵士問わず、和気あいあいとやっている。

甲板で敬礼をすればそれこそ笑いの的であるのだ。

そのことが彼の価値観に影響を与えている。

一方、ムスツと海図を眺めている参謀長の宇垣は、海軍兵学校を好

成績で卒業し、彼の気性も相成って文字通りの理論家であった。宇垣にしてみれば、南雲の考えが理解出来なかった。

上官とは厳格であり、至高の存在であるという認識があったからである。

しかし、不仲という訳ではなかった。

寧ろ宇垣は南雲を好いていた。

「オアフ島までは？」

南雲が再び口を開いた。

「はっ！現行速度で約5時間後であります。到達時刻はハワイ時間、

七 八！」

決戦の時刻は刻一刻と迫っていた。

決戦前夜…暗夜の航海（後書き）

はじめまして天照アマテラスと言います。

以後お見知りおきくださいませ。

さて、初投稿の処女作です。

まあ、このあとどうなるのかさっぱりわからないのですが、応援して頂けると嬉しいです。

アドバイスして頂けるともっと嬉しいです。

あらずじでわかってますが、戦艦による奇襲ですね。

詳しい方は不可能であるというかも知れませんが、大丈夫です。

まあ、楽しみにしてください。

学生なもので、更新の遅延は勘弁ください。

真珠湾攻撃構想…戦艦主力への経緯

「此処で賭けずに何処で賭けるのか！」

南雲はふと連合艦隊司令長官山本五十六の言葉を思い出した。

軍令部の回答を持ち帰った黒島の言葉を聞いて叫んだ一言である。

「南方作戦を鑑み、空母の投入は赤城、加賀の第一航空戦隊に限る。」

これが回答であった。

山本は連合艦隊参謀の黒島亀人に伝家の宝刀を授け、軍令部へ最後の交渉に向かわせたのである。

「この作戦が認められなければ、山本長官は連合艦隊司令長官の職を辞すると仰せである。」

これが伝家の宝刀であった。

確かにその効果は絶大であった。

はじめそれを聞いた軍令部次長の伊藤整一中将は驚愕し、事の仔細を軍令部総長永野修身の元に報告に向かったのである。

此処までは目論み通りであった。

しかし…

「空母の投入は赤城、加賀の第一航空戦隊のみに限る。」

これが回答であった。

予想は脆くも崩れさり、それを聞いた黒島は、より一層老け込んだような様子であった。

しかし虎の子の空母である。

事前の兵棋演習の結果を踏まえれば当然の回答であろう。

空母四隻のうち、三隻の沈没という予測が出ていたからだ。

黒島はただ、山本の元へ帰るしかなかった。

南雲が山本のこの怒号を聞いたのは、おそらく黒島が報告をした時

であつたのだらう。

この時南雲は所用で、ちょうど連合艦隊司令部に居合わせていたのだ。

第一航空戦隊のみの火力では真珠湾強襲は不可能であつた。

だからこそ、山本長官はこれほど強硬な交渉に当たつたのである。

日本の第一第二、そして新鋭の第五航空戦隊の総火力によつて初めて成功が確信できるものだ。

しかしそれができないとなると、また初めから案の練り直しをしなければならぬ。

11月：その時は刻一刻と近づいていた。

その時は何の前触れもなく訪れた。

各艦隊、航空隊等の主立つた司令官が連合艦隊司令部に召集されたのである。

その中には南雲の姿もあつた。

会議場の空気は重かつた。

直接的な対米作戦が振り出しに戻つたのである。

誰もがそう思つていた。

しかし…

「ハワイ作戦の発動のめどがついた。」

山本長官はただこの一言だけを發した。

議場がざわめきだした。

「して、その内容とは？」

興奮気味に誰かが叫んだ。

壮年の将官である。

階級は少将、顔はふくよかであり、胴も比較的太い。

要するに肥満体である。

しかし、その下には後の猛将という評価に違わないたくましい筋組織が眠っている。

山口多聞少将であつた。

この問いに、山本は手でざわめきを制し、口火を切つた。

「我ら大日本帝国海軍の誇る戦艦部隊による米太平洋艦隊、及びオアフ島真珠湾軍設備の撃滅である。」

真珠湾攻撃構想…戦艦主力への経緯（後書き）

こんばんは

ようやく、日本の代表する提督が四人登場しましたね。

山本五十六大将、南雲忠一中将、宇垣纏少将、山口多聞少将皆さん
勿論ご存知ですよ？

ご存知出ない方は…まあ、簡単に説明しましょう。

山本五十六大将は開戦時の連合艦隊司令長官です。

ハワイ作戦の発案者でもあり、その後のミッドウェイ作戦等の発案者でもありますね。

後に海軍甲事件で亡くなってしまいました。

宇垣纏少将は本編では南雲艦隊の参謀長ですが、史実は違いますので悪しからず。

山本長官とは仲があまりよろしくなかったとか。

提督時代よりも、参謀の時のほうが評価が高いようですね。

なんか長くなりそうなのでこの辺ですみません。

決して知識不足ではありませんから（笑

さて、作戦の詳細は次回に持ち越しです。

申し訳ありません。

時間はハワイ作戦時にもどり、平行して語ろうかと思えます。

何か此処は違うと思うところがありましたらご教示願います。

では失礼します。

第一航空戦隊発進…勝利に向けて

南雲は目をつむり、作戦の構想を再び確認し始めた。

「うーむ…」

南雲は低く声を漏らした。

果たして、どうなるのか…

南雲自身この作戦については未だに疑問を持っていた。

立案した山本長官の考えも理解でき、非常に効果的でもあると分かっていた。

しかし、あまりにも危険過ぎる。

その作戦とは戦艦による奇襲作戦である。

ハワイオアフ島の真珠湾は地理的に非常に港湾施設に適したものであった。

しかし、その港湾は外海から文字通り丸見えであり、戦艦級の射程を以ってすれば簡単に施設を攻撃できるという致命的な欠点を持っていた。

アメリカ軍もそれを承知していたため、長い年月を掛けて防衛施設の充実に努めていたの言うまでもない。

1921年にはウィルソン砲台も完成し、その40cm級対艦砲の存在は、当時主力と思われていた戦艦による攻撃を不可能にしてみあった。

この要塞群は総称してオアフ島要塞とよばれているが、万全と思われたこの設備にも弱点があることがわかった。

それは対空火器が皆無であるということである。

山本長官はこのことも踏まえ、航空奇襲案を提出したのだろうか、受諾されることはなかった。

しかし、航空機無しではこの作戦の成功は望めない。

何とか赤城、加賀を基幹とする第一航空戦隊を確保したが、それは火力不足は否めなかった。

そこで出てきたのがこの戦艦併用案であり、これも山本長官の案である。

戦艦での攻撃の懸案はたった一つ、ウィルソン砲台である。

これを第一航空戦隊の航空戦力によって沈黙させ、基地施設、及び敵駐留艦隊を戦艦の火力を以って撃滅させる。

これが作戦案の内容であった。

そして今現在、その作戦は進行しつつある。

「宇垣よ…」

南雲は宇垣参謀長の名前を呼んだ。

「はっ？」

宇垣は直ぐ後ろに控えていた。

南雲の問い掛けに言葉を返す。

「君は、この作戦をどう思うかね？」

「ですから、そのようなお言葉は…」 「私は真剣に聞いておるのだよ。」

何時ものからかいかと思っただが、その声の鋭く、重い質感にそうではないことを感じた。

宇垣は多少気後れしたが、気を取り直し自身の考えを述べ始めた。

「私は…山本長官の発案にも一利あると思います。しかし、初めの航空機による奇襲というにはあまり賛同出来ませんでした。」

淡々と宇垣は自身の考えを話している。

南雲はそれをただ黙って聞いていた。

「私は未だに航空機の有効性に疑問を持っておりません。海戦の主力は未だに戦艦であり、例え戦艦の甲板を破損させる攻撃能力を持っていても、実際に航行する艦艇へ、しかも対空砲火の合間をぬつての雷爆撃等、当たる確率は著しく低いことでしょう。しかも、航空攻撃においては敵艦の射程に入らねばなりません。高射程、大口徑の砲を以って敵射程外から撃滅する事こそ、被害を最小に抑え、有利に戦えるものでしょう。だからこそ、私はこの作戦に概ね賛同したのです。」

宇垣は元々航空機の有用性については疑問をもっていた。

しかし、廃案となった航空機による奇襲案が表面化してからは、その思想を心深くにしまい込んでいたのだ。

大艦巨砲主義、これが宇垣の本心である。

少なくとも、今の時点ではそうであった。

「では、戦艦による今回の案には賛成であるということかね？」

南雲の言葉には少し安堵感があった。

口元にも何時もの緩みと細い皺が幾筋も見える。

「はい、成功は間違いないでしょう。」

暗黒の世界だった外の風景もだんだんと明るくなっていった。

宇垣がこう返答した時、ふと南雲の表情を確認しようとしたが、叶わなかった。

顔を覗かせた明星の一線の光にしかいが奪われてしまったのだ。

ただ、南雲忠一の深い吐息だけが耳の中に入って来たが、それがどいう意味だったかはわからない。

その後直ぐに南雲は艦橋を後にした。

外からは整備兵の声が聞こえている。

目が馴れると、外には黒煙をたなびかせながら航行する空母加賀があった。

どのくらい離れているのだろうか。

逆光で黒く映るその船体は、小さな島のようにも見える。

宇垣はしばらくしてから同様に空母赤城の艦橋を出た。

もはや南雲の姿はない。

艦橋に残っているのは数人の参謀と、艦橋要員だけとなった。

海は予想以上に荒れていた。

赤城のこの巨体ですら、大きく上下に動いているのがわかる。

「提督！」

ある士官がさういうと、直立のもと、敬礼をした。

南雲もそれに返す。

士官は敬礼をとくと、目を細めながら足早に近づいて来た。

「天候は概ね良好ですが、波が激し過ぎます。これでの攻撃機の発艦は危険ですね。」

航空参謀であった。

飛ばすにあたり波のうねりに不安を覚え、甲板に出ていたのだろう。そういえば、艦橋にはいなかったなと南雲は思った。

「まったく不可能なのかね？」

「いえ、ただし危険が伴いますぞ。特に雷撃機の九七式は大型ですので、魚雷を抱えてのこのローリングでの発艦は危険が伴う旨を申し上げた次第です。」

南雲の言葉にその参謀は補足を加えて再び進言した。

宇垣はその時ちよと到着したばかりだった。

南雲に同伴し、話を聞いていた者にはその航空参謀に賛同しているような感じである者もいた。

南雲は少しの間目をつむり考えた後、飛行兵への激励を行うと言って飛行甲板の下へ向かっていった。

司令部の参謀達もそれに続く。

上甲板に降りればそこには航空機が所狭しと並んでいた。

整備兵は忙しく動き回り、搭乗員は各飛行隊長の元で号令を待っていた。戦場へ向かう兵士の猛々しさが、空気を介して熱気と微かな円滑油の匂いとでひしひしと伝わってくる。

ある兵士が甲板下においてくる南雲の一团に気付き、敬礼をした。

それは隣から隣へ連鎖的に広がり、南雲達はその中を歩いていく。

艦のほぼ中央にきた時、南雲は搭乗員を呼ぶように指示をした。

「参謀、さっきの判断は本人達に決めてもらうことにしよう。」

南雲はさっきの航空参謀にこういった。

彼はいまいち理解出来ていなかったようだが、南雲は構わず兵士へ話し始めた。

「第一航空戦隊全兵に告ぐ。諸君らは皇国勝利の先駆けとなる栄誉

を得た。その力を以つて敵太平洋艦隊を撃滅せしめ、主任務たるオアフ要塞を沈黙せしめることを切に願う。皇国の興廢はまさにこの一戦にある。各員の一層の奮励と努力を望む。」

南雲の話はこう締め括られた。

それに兵士達も叫びをあげ、呼応する。

この騒ぎを抑えると、南雲は言葉を付け加えた。

「なお、此処で諸君らの判断を仰ぎたいと思う。」

一瞬皆がざわめいたのがわかった。

ある者は隣の者と顔を合わせ、一体どういふことだといった感じだ。南雲はそれには構わず続けた。

「海は荒れ、此処にいる航空参謀は私に発艦は危険だと進言してきた。しかし実際に艦を飛び立つのはお前達である。そこでお前達に聞きたいのだ。このローリングの中でも魚雷を抱えたまま飛べるか？」

兵士達、特に攻撃機乗りの搭乗員達はその目に炎をたきつけ、口々にやれますといった。

一人、二人とその声は繋がり、最終的には誰一人危険だと言う者はいなかった。南雲はこの大合唱を聞いて、これで良いだろうと言つた風に進言した航空参謀に合図をした。

それに対し航空参謀は深々と頭を下げた。

「よろしいのですか？」

しかし宇垣は怪訝な表情で南雲の考えを確認した。

後ろで聞いていた宇垣であったが、その結論にはイマイチ賛同出来ていないようであった。

「良いではないか。やらしてみよう。」

南雲はにこやかにこれだけを言うと、未だぶすつとしている宇垣の肩をぽんと叩き、来た道をどんどんと帰っていった。

日は既に地平線からその姿を全て覗かせ、海は青く、空は白かった。大低は波の音だけの静かな大海原に、今にも飛び立とうとレシプロ機のエンジン音が高々と響いている。

加賀からは既に航空隊が発艦しているのが赤城からは見えていた。その赤城でも一機、また一機と艦を飛び立ち、最後の機が飛び立つと皆が手を振り、その武運を祈っていた。

全機無事に帰還…

これが送り出す者、送り出される者の共通の願いであった。

南雲は艦橋でその光景をずっと眺め、飛び立つ機体が雲の上に消えるまでその顔の険しい表情が消えることはなかった。

第一航空戦隊発進…勝利に向けて（後書き）

こんばんは。

ようやく次話となりました。

何とも執筆とは難しいですね。

文章も稚拙で恥ずかしい限りです。

さて、真珠湾攻撃のため、航空隊が発進しました。

ようやくです。

この時の航空機は零戦二一型、九九式艦爆、九七式艦攻と日本を代表する機体ばかりです。

まあ、艦爆はあまりよろしいあだ名はつけられていませんでしたが、それでも日本で大戦中最も使われた艦爆には間違いないですね。

九九式棺桶…

縁起でもないですよねえ。

まあ、何はともあれ、今後ともよろしくお願いします。

トラ・トラ・トラ！！ 我奇襲ニ成功セリ！

第一次攻撃隊は既に全機空に上がっていた。

加賀の攻撃隊も同様である。

両隊合わせて71機の航空隊だ。

戦闘機隊、爆撃隊、雷撃隊がそれぞれ編隊を組み、まるでこの太平洋を横断する渡り鳥の様にV字型に飛行している。

赤城、加賀の艦上には既に第二波の準備が始まっており、此処までは順調に進んでいるようだ。

赤城攻撃隊の淵田美津雄中佐は総指揮官として九七式艦上攻撃機を駆り、目的地であるハワイオアフ島に向かっていった。

「おいお前ら、下を見てみる。戦艦長門だ。」

淵田中佐は同乗している兵士にそういった。

九七式艦攻は三人乗りの攻撃機である。

操縦、爆撃、計器操作とそれぞれ役割が割かれており、仕事にあたっている。

話を振られた後ろ二人は、頭を左右に動かし、雲の合間から下を覗いた。

あれは比叡だ、陸奥だと口々に言っている。

実際に下を見れば、単縦陣で航行する戦艦部隊が見えた。

戦艦長門をはじめとする合計6隻の部隊だ。

長門、陸奥、伊勢、日向、比叡、霧島…

金剛型戦艦が全て投入されていないのは、既に南方作戦への投入が決定されていたからである。

作戦はハワイ作戦だけではないのだから、山本長官もそこは突っ込まなかつたのであろう。

仕方のないことである。

「しかしよくもまたこれだけ大量に集められたものだな。」

淵田は既に視線を前方に戻しこう言った。

「それだけ期待を掛けているということですよ。我らが日本帝国が誇る戦艦部隊が向かうというのはそういうことです。これならば成功間違いなしですね。」

後部の部下はそう言うのと、どっと笑った。

「だと良いがな。」

淵田はこれだけを言うと、しばらく黙ってしまった。

笑った兵士が気まずい雰囲気ですぐにしよげてしまったのは言うまでもない。

(何故軍令部はこれほどまでの戦艦を投入したのだろうか?)

淵田は心の中で疑問を持った。

伊勢型戦艦は燃費の問題から、実用性が乏しく許可がでるのは比較的容易だろうが、長門、陸奥は最新鋭の戦艦だ。

山本長官は一体どんな手を使ったのだろうか?

空母投入が頓挫し、それよりも重要な戦力である戦艦投入に許可が下りるとは…

淵田の視線は前を向いていたが、意識は完全に違う世界に行っていた。

淵田はこの作戦の直前まで参謀を務めていた。

飛行隊長は参謀よりも格下である。

つまり降格ということだが、これは作戦立案者であった親友源田実のたつての願いだっただけだ。

これにより、第六航空戦隊就きの参謀から、飛行隊長に転任したのである。

元が参謀経験ということもあり、こういうことが容易に想像できたのである。

「中佐！見えましたよ！」

後ろからの声に淵田ははっと我に返った。

目を凝らすと水平線の上には緑色の隆起が見える。戦艦部隊は既に後方にあり、あの島々よりも小さな黒点になっていることだろう。

そうこうしているうちにハワイ諸島は近づいて来た。

緑色の隆起は次第に輪郭を帯び、一つ一つの島が認識出来るようになってきた。

茶色、緑、橙とその色彩も豊かにはっきりとしてくる。

「後は発見されないことを祈るだけだ。此処からが本番だぞお前ら。神経を研ぎ澄ませよ。」

「はっ！」

淵田の激に後部の二人が答えた。

息遣いが荒くなっている。

未だに敵は見えないが緊張しているようだった。

「緊張するな。訓練を思い出せ。こんなことで参る胆の小さな男じや誰も嫁いじゃくれんよ。」

「はい…」

一人が答えた。

必死に平常心を保とうと、努力しているのがわかる。

ニイハウ島の南端を抜け、カウアイ島を通過し、目的のオアフ島はすぐ目の前に迫っていた。

此処まで航空隊は一切誰の目にも触れずに来ることが出来た。

いや、見られていたかもしれない。

しかし何の反応もないことから、攻撃隊の皆は成功を確信していた。

「よし、オアフ島だ。全隊飛行隊長に打電、各隊任務遂行を遵守せよだ。」

「わかりました。全飛行隊長機に打電、『各隊任務遂行ヲ遵守セヨ』」

通信係の最後部の兵士が電文を送っている。

遂にオアフ島上空に到達したのだ。

島の南部は平地が広がっていて、連なる山々は島の北部に見えた。

真珠湾が見える。島の内部に入り込むその港は、外洋からも容易に見ることができる。

淵田は双眼鏡でその様子を確認した。

一隻、二隻…

そして乱暴にそれをしまつと、口元にやつたと笑みを浮かべ、こつと言った。

「よし、敵艦隊を確認した！司令部へ打電『我奇襲ニ成功セリ』」
此処で淵田は深呼吸する。

そして運命の一言を発した。

「『トラ・トラ・トラ』だ！」

トラ・トラ・トラ！！ 我奇襲ニ成功セリ！（後書き）

こんにちは。

ようやく次回戦闘シーンになりますね。

もしかしたら、戦艦部隊の航行シーンになるかも知れませんが…

此処いらで上手く表現出来るようになりたいですね。さて、史実の真珠湾攻撃でもトラ・トラ・トラを打電したのは淵田美津雄中佐でした。

そののち信号弾を撃ち、奇襲攻撃に入ったようです。

史実ではもつと大部隊でしたが、今回は71機と少ないので、やはり手が回らないのかなあ…

次話は史実の奇襲よりも強襲じみてるかもしれません。

最後に感想などお待ちしています。

直した方がよいところ、要望などがあればどしどし寄せてください。では、失礼します。

燃ゆる旗は日か星か……

何時も通り波は穏やかだった。

朝のお決まりの朝礼が始まるまではこの穏やかな一時は続くだろう。そして朝礼が終わり、日が傾けばまたこの静寂はやってくるのだ。湾内には見るものを圧倒する勇壮な巨体が幾つも横たわっている。

我がアメリカ海軍が誇る太平洋艦隊の戦艦だ。

周りに浮かぶ駆逐艦がより一層小さく見える。

それより小さい船は尚更だ。

男はうんつと背伸びをした。

男が立っているのは、真珠湾入口の岬だ。

潮風に吹かれ、此処での伸びはさぞや格別なことだろう。

「マツキンリー！」

後ろで叫ぶ声がした。

マツキンリーと言うのだろうその男は、後ろを振り返った。

「何だ？もう交代か？」

口に片手を添えてマツキンリーは叫んだ。

視線の先には腰に手を当ている男がいる。

「いや違う。レーダーに何か映ってるんだ。見てくれないか。」

マツキンリーはフンと鼻を鳴らすと、向かいの男の所へ向かって行った。

その男の後ろにはレーダー施設が見える。

施設と言うには小さなものだ。

大型トラック程のボックスで、その屋根にはパラボラアンテナが取り付けてある。

これは移動式のレーダーで、現在六基が島に配備してある。

「これだ…此処から西南西の方角だな。」

男は言った。

彼はジョンと言い、マツキンリーとは同期の間柄だ。

「ああ、距離はどのくらいだ。ジョン。」

マッキンリーの問い掛けに、ジョンは眉間にシワを寄せながら情報を読み取っていた。

「あー…待ってくれ…約…」

「早くしろよ。」

手間取るジョンをマッキンリーは急かすが、手間取るばかりだ。

「俺が変わる。」

痺れを切らしたマッキンリーはジョンをどかせて席をかわった。

しかしどうしたことだろうか。

レーダー画面が一面真っ黒になり、機能を停止してしまったのだ。

「まただ…畜生。」

マッキンリーはこう吐き捨てる、画面をおもいきり殴った。

「しかたない。俺は下まで行って本部に電話してくる。何か見えた事だけでも伝えてくるよ。」ジョンはこう言うと、早足で小高い岬を下って行った。

「ああ、俺はちよっくらこいつをみてるよ。」

マッキンリーはジョンにこう言って送り出した。

当時のレーダーは新式の兵器であり、故障もしょっちゅう見受けられた。

また、操作手の能力も訓練を受けたとはいえ、未熟であった。

此処オアフ島もその例外ではなく、ジョンの手間取り様もレーダーの故障もごく普通の事なのである。

しかし、彼らにとつては好都合であった。

そう、今まさに獲物に襲い掛からんとする鷹のような、此処からもうそれほど距離もないところを飛行する、日本真珠湾攻撃隊にとつては……

マッキンリーは配線盤を開き中を覗いていた。

別に何処も悪くはない。

「どれだ…これか…?」

多種多様なコードを引つ張り、確認するほどに頭を傾げる。さつきから数分がたっていた。

「ん?」

何か耳に違和感を感じた。

配線の林を抜け、頭を上げる。

そして狭苦しい中から外に出ると、潮風がさつきと同じように吹いているのを感じた。

ざわざわという風の中に、何だか違う音が混ざっているのをマッキンリーは感覚的に感じていた。

次第にそれは確かに知覚出来るようになった。

「何だこの音…」

トランペットの低音というか、オーボエの地から沸く音のような、低く波のような音を感じられる。

耳をすませ、彼自身探知器のように首を振る。

特に感じられる方に目をやれば、そこには黒い点が幾つも見えた。

鳥か…いやそれにしては大きすぎる。

不可解な音と物体はマッキンリーにえもいわれぬ不安をもたらした。次第に黒い点は大きくなってくる。

どうやら幾つものそれらは隊列を組んで飛んでいるようだ。

「飛行機か…」

物が判れば恐くはない。

この音もあのエンジン音だと納得した。

「演習の話は聞いていないんだがなあ。」

マッキンリーは頭をかく、しかしその仕草は次第に遅くなり……手がとまった。

「何だあれは！米軍機じゃないのか!？」

思わず叫び、口はあいたまま立ち尽くす。

勢いよく近づくその一団は、はつきり大きく見えるようになり、明らかに自分達のと違うその航空機にマッキンリーは驚愕した。

それもその筈である。

宣戦布告など未だアメリカは受けておらず、何よりこんなアメリカの領域奥深くまで未確認の航空機が侵入してくるなど、思いもしなかったからだ。

その航空隊は一拳にマツキンリーの上空を抜けて行き、その向かう方向を見れば真珠湾が見えた。

通り抜ける航空機一機一機の機体に塗られた真っ赤な円を見ると、彼の思考は一気に繋がり、口を震わせながら叫んだ。

「やめるー！」

「よし、攻撃開始だ。皆よくやってくれよ……」

攻撃機、九七式艦攻の中でこう漏らすのはこの攻撃隊の総指揮官、淵田美津雄中佐であった。

総機数71機、第二次攻撃隊を合わせても133機と、当初の構想よりも随分小規模なものとなってしまった。

この数を最大限活用して、後続の戦艦主力部隊の驚威となるウィルソン砲台をはじめとする各種砲台を破壊し、飛行場を潰さなくてはならない。

「よし、俺達も向かうぞ！」

淵田はそう言うと、この大きな体に加速をつけ、目標であるフォードアイランド上空に向かった。

隷下の九七艦攻水平爆撃隊も同じように、緑色の大柄な体を力一杯加速させる。

此処フォードアイランドには大規模な飛行場があるのである。轟音が響いた。

体を突き抜けるように振動が抜け、きーんと耳元に音が残る。雷撃隊の放った魚雷が命中したのである。

最後の部下がその様子をしっかりと見ていた。

何の前触れも無く、停泊している戦艦の右舷から巨大な水の柱が出

現する。

船体は大きく揺れ動き、横に傾く。

まだ沈みはしない、船体が傾いたただけだ。

流石は戦艦といったところだろう。

「よし、魚雷投下！」

一機の雷撃機がまた魚雷を投下した。

水面を滑空する機体から落とされた魚雷は、その身を水に浸すやいなや白い泡を立て、傾く戦艦に一直線に向かっていった。

白い軌跡を描き、弾丸の如く突っ込む。

刹那、轟音が響き水柱が高々と立ちのぼる。

さつきとは違い、黒煙が立ち上る。

流れ出た重油が水面を覆い、まさに水が燃えている。

立ち上るその煙は船体を包み、火炎が船を焼いていた。

警報がようやく鳴った。

その響きを機内で淵田は聞いていた。

目前には飛行場が広がっている。

滑走路には多数の航空機が展開し、まだ格納庫にも大量にあることだろう。

幸いにも、まだ一機も空には上がってはいなかった。

「爆撃準備！」

「了解！」

淵田は爆撃を指示し、後ろの部下がそれに答えた。

爆撃隊は飛行場の上空に差し掛かる。

「投下！」

その声とともに腹に抱えられた黒い塊が地上に落ちていく。

周りの機体も同様に爆弾を切り離し、投下した。

風を切り、爆弾は落下していく。

爆弾はぐんぐんと滑走路に迫り、そして火炎が一面を覆い、爆風がなにもかも吹き飛ばす。

800キ口爆弾の余りにも大きな雨粒が降り注ぎ、焼き払い、薙ぎ

倒している。

不幸にも路上の航空機は燃え上がり、給油車はそれ自体が爆薬と変貌し、滑走路を火の海に変えた。

地上の米軍はなにも出来ずにただ逃げ惑っている。

いざ上がるうとする航空機も、護衛の零戦の機銃掃射により瞬く間に火だるまとなった。

フォードアイランドの大規模航空戦力は一瞬のうちに焼き払われたのである。

「よし、我々は任務完了だ。」

淵田は力強く頷いた。

火炎に巻かれた飛行場に星条旗が掲げられている。

しかし、炎はその米国旗を飲み込み、やがて見えなくなった。

燃ゆる旗は日か星か……（後書き）

こんばんは。

次話が遅くなり申し訳ありませんでした。

さて、まだまだ真珠湾攻撃は続きます。

次回をお楽しみに。

では、失礼します。

鋼鉄の咆哮…はためくZ旗勝利は我にあり

もはや航空爆撃は始まっている。

電文で既に此処にもその事実は伝わっていた。

もしそれが無かったとしても、この戦艦長門の艦橋から見える港から上がる黒煙で、容易に判断できたことだろう。

戦艦部隊は、単縦陣でオアフ島へ向けて進んでいる。

長門、陸奥、伊勢、日向、比叡、霧島の六隻の編成だ。

「目標までの距離はどのくらいか？」

壮年の司令官が砲術長に尋ねた。

「30000mちようどです。後5000mで目視での着弾確認可能距離となります。」

双眼鏡を片手に測距儀についていた砲術長は、直ぐさま正確な距離を弾き出し、その戦隊司令官に伝えた。

司令官の名前は三川軍一、海軍中将である。

「よしわかった。主砲の準備は出来ているか？」

三川は砲術長に再び質問をした。

「はい……しかし、現時点では着弾の確認が難しいですが。」

「よい。主砲斉発用意だ。」

「了解しました。」

やり取りはほんの一瞬で終わった。

三川の命令は、砲術長の号令により兵士達に伝えられる。

同時に、隸下の戦艦にも同様の命令が伝えられ、各々がその時の為仕事を始めた。

黒煙はもくもくと絶えることなく空高く昇っている。

色合いもより一層濃くなり、その深く先の見えない暗黒が、この後の戦争の行方を暗示しているようだ。

「さて、どうなるのか……」

三川はぼそつと呟いた。

視線は艦橋の窓越しにその煙の方に向けられている。

両手を後ろに組み、肩幅程足を開き、まさに直立不動の体制だ。

三川は戦艦の威力というものを信じていた。

しかし過信はしていなかった。

彼は長く艦隊勤務を経験し、その動かし方を熟知していたからである。

巡洋戦艦金剛の乗組員にはじまり、分隊長、航海長、そして戦艦霧島の艦長となった。

その後は第二艦隊の参謀長に着任し、現在海軍中将としてこの部隊を率いている。

同時にそれ故、欠点も否応なく見えて来てしまった。

艦の鈍重さ、燃費、そして航空機には及ばない攻撃射程……

（これからは航空機の時代かな……まあ、私には関係のないことだ。）

三川は心の中でこう思った。

しかしやりきれないこの哀愁の念は何だろうか？

三川の胸には、何やら纏わり付く重い塊が残っているようだった。

人生を全否定された。

時代の変遷というものに……

「全砲弾装填完了！」

部下の声に三川の意識は現実には引き戻された。

目の前には相変わらず、黒いものが立ち上っている。

「艦長面舵、速度微速！」三川の声が艦橋中に響き渡った。

舵は切られ、艦は数秒間の沈黙の後にゆっくりとその体を右に曲げている。

同時に主砲塔はゆっくりと回転し、その黒光りする大砲の照準を彼方の目標に向けて定めた。

後続の艦もそれに倣い、その幾門もの砲筒の口を向けていることだろう。

「仰角よし！照準よし！」

測距儀についていた砲術長が叫んだ。

後は司令官三川軍一の号令を待つのみである。

三川もその報告にゆっくりと頷く。

砲術長に向けられた視線は再びオアフ島に向けられた。

（私は最善を尽くすのみ。腹は決まった……）

「主砲斉発！ 皇国の興廢この一戦にあり！ 各員一層奮励努力せよ！」
まさに口火は切られたのだ。

雷鳴の如き轟音が響き、艦が揺れる。

煙がうつすらと視界を遮り、艦内を暗くした。

耳には砲撃の余韻が残り、まだそれが終わらないうちに新たな轟音が次に続いた。

陸奥が放ち、伊勢が放つ。

まさに絶え間無い一斉発であった。

真珠湾はまさに火の海であった。

雷撃で破壊された艦の装甲の間からは重油が流れ、それに引火し、

火炎が海面を覆っているのだ。

陸上でも滑走路、武器庫、弾薬庫などの軍事施設は爆撃によって破壊され、不幸にも軽質油に引火した暁には、高々と黒煙を空に立ち上らせる結果となった。

しかし米軍も黙ってはいなかった。

「隊長！ 対空砲火が激しくなっています！」

後方で状況を観察していた部下が叫んでいる。

隊長、淵田美津雄中佐もそのことはわかっていた。

（やはり数が足りないか……）

心の中で淵田は思った。

なけなしの高射砲ではあったが、天高く火を噴きながら必死の抵抗を試みている。

しかしそのなけなしの対空砲火で、すでに数機の航空機が落とされ

てしまっていた。

すでに淵田も、一機の九七式艦攻が胴を貫かれ、火の手をあげながら地上にたたき付けられたのを目の当たりにしている。次は自分かもしれない。

この恐怖と緊張は空を飛ぶ者にしかわからないだろう。

撃たればもはや逃げる場所などないのだから。

どんなに自分の腕に自信があろうとこの気持ちは失くならず、心の奥底にはいつもうごめいていた。

「爆弾は全て投下しました。残弾はゼロです。」

「そうかわかった。他の奴らもそうだろう。全機帰還だ信号弾。」

「はっ！」

(ここからは長門の仕事だ。)

部下とのやり取りを終え、これ以上なにも出来ない踏ん切りをつけると、港で炸裂する砲弾の主である戦艦に後を託した。

しかし……

「隊長！三時の方向より敵航空機編隊接近！」

やはり足りなかったと淵田の思いは確信にかわった。「滑走路を潰しそこねたな…生き延びるぞ。ここは零戦の仕事だ。板谷らの腕を信じよう。」

淵田の額から汗が流れた。

仕事を終え、攻撃隊は西に向かう。

振り向けば、迎撃に向かう零戦隊が見えることだろう。

今此処に初めての空中戦が展開される。

鋼鉄の咆哮…はためくZ旗勝利は我にあり（後書き）

遅れて申し訳ありませんでした。

内容も悪くなつてしまいました。

時間を見つけて後に改善したいと思えます。

感想などありましたらどしどしお寄せください。

お待ちしております。

戦場の荒鷹

零式艦上戦闘機、略して零戦と言えばその名を知らない者はいないだろう。

特に初期型である零戦二一型は、抜群の運動性能とその長大な航続距離によって、史実の戦争においても空の王者に君臨した。

今此処には、その灰白色の機体を煌めかせて飛行する王者が一八機いる。

九機ごとの二個分隊が、それぞれに編隊を組み飛行しているのだ。後方には守るべき戦友が点となっており、前方にはそれを阻もうとしている群れが幾多も見える。

米軍機F2Aバッファローの編隊だ。

三十はいるだろうか。

こちらを上回る数の戦闘機がこちらに向かってきている。

「みんな死ぬなよ……」

一機の零戦の中で操縦桿を握り、一人の男はこう呟いた。

此処を抜かれれば退避する友軍を守る盾はない。

自然と男の肩に力がある。

しかし彼の呟きは後方の友軍に対してのものではなかった。

それは部下である隊員、荒鷹達への言葉であった。

板谷茂少佐、二つの戦闘機隊のうちの一個分隊を指揮する分隊長が彼の名前であり、今の肩書である。

部下である八名の隊員は自分の宝である。

家族も同様、何処その親類よりかはずっと上の、苦楽を共にしてきた最高の友でもある。

しかしこの戦闘でその八宝を失うかもしれない。

自身の死の恐怖は微塵もなくなっていた。

かわりに部下の死…彼の頭の中はその恐怖に満ちている。

敵のバッファロー隊は無秩序に向かって来ていた。

これから一戦を交えるであろう敵……

(彼らも同じなのだろうか)

板谷は考えていた。

彼らも友を慈しみ、この戦いに挑んでいる。

しかしその親友を失った時は何を感じるのだろうか。

やはり感じることは同じだろう。

そしてそれを奪う立場にお互いはいる。

相手を知らないことがせめてもの救いだと思っただ。

戦いは避けられないものであり、部下を助けるには相手を倒さねばならないのだから……

もはや敵は射程に入った。

敵ももちろん同様である。

板谷は桿を傾け、戦闘の体制に入った。

他の零戦も同様である。

弾丸のように突っ込んでくる敵機は、編隊の合間を縫うように機銃を乱射しながら抜けていく。

旋回し、再びその機銃四挺の大火力の応酬を浴びせようと各機体はその体を持ち上げた。

一機の機体が炎を上げる。

日本機……違う、米軍機であった。

日本の誇る零戦はいち早くその機体を翻し、未だ旋回途中のバツプアローを襲ったのだ。

機体を起こし、その無防備な体を晒していた相手は絶好的の的となっていた。

ここぞとばかりに取っついておいた20mmの銃弾は、主翼をえぐり、胴体をエンジンごと貫いた。

機体は炎上し、天を仰ぐその機体は減速する。

一瞬の停止の後、それは黒い煙りをたてながら墜ちていった。

板谷も歯を食いしばりながら操縦桿を握り、必死に敵機に食らいついている。

「くっ！」

なかなか敵を捉えられない。

毎時数百Kmの重みが体にのしかかり、自然と息が漏れだした。今だと板谷は直感的に感じた。

機銃のトリガーを引き、両翼の二門の口から火弾が放たれる。

幾筋もの弾道は相手を捉えようと殺到し、そして逸れていく。

相手も振り切ろうと必死なのだろう。

必死に体をよじらせ弾を避けている。

しかしそれも虚しく胴体は爆発と同時に黒煙を上げ、操縦を失った

機体は、空を背に墜落していった。

板谷は息着く暇もなく次の目標を探し辺りを見渡した。

しかしもはや辺りに敵はいない。

全機撃墜したのだ。

この時アメリカの飛行兵は零戦の特性など全然知らないに等しかった。

三十機いたバッファローは堅牢な戦闘機であったが、運動性能では零戦には分が悪かった。

不幸にも日本機と軽んじ、格闘戦に持ち込んだ米軍機は逆に相手の土俵で戦うことになり、空の土俵から蹴落とされていたのだ。

ものの数十分の出来事であった。

「よし、やったな。」

すーっと力が抜ける。

板谷は一息着くが、未だ敵地の上空である。

緊張感は再び到来し、信号弾を打ち出すと部隊の編成に取り掛かった。

友軍は空の彼方に消えており、そちらの追っ手は心配ない。

零戦は再び編隊を組みさつきと同じように飛行している。

一、二、三……

西に向かう部隊の中で板谷は必死に数を数えていた。

しかしその懸念の相も次第に緩み、一番の肩の重しが外れたのだろ

う、さっぱりとした笑顔で母艦赤城へ向かっていった。

戦場の荒鷹が空の王者に君臨した瞬間である。

鷹の目は遙か水平線の向こうを見続けていた。

戦場の荒鷹（後書き）

こんばんは天照です。

なんだか戦闘がこじんまりとしまして申し訳ありません。

誰か戦闘の描写をアドバイスしていただけると非常に有り難いのですが、みなさん小さいことでもいいのでご教示ください。

さて、みなさん零戦といったらどんなイメージがあるんでしょうね？
機体色は白ですか緑ですか？

航続距離はどうでしょう？

様々な型の零戦がありますけどやはり二一型が一番そのイメージにあうものなのでしょうかね。

さて、取り留めもない話で申し訳ありませんでした。

ではまたの機会に

失礼します。

リメンバーパールハーバー

ズーン

轟音は地の底から響き渡り、巨大な水柱が高々と上がった。

そして水の柱は形を失い降り注ぐ、水滴が長門の甲板を濡らし、砲塔を湿らせる。

熱を持つ砲身に打ち付けられた水滴は直ぐさまその姿を湯気に変え、すーっと消えていった。

静かな一瞬、つかの間の静けさが海上を包んでいた。

しかしその静けさの中にたたずむ鋼鉄の城の中では、それとは逆の動騒と怒号とに支配されていた。

「次弾装填急げ！」

揺れる艦橋で艦長が叫ぶ。

室内では士官兵士問わず全ての者が一心不乱に働いている。

幸い砲撃が始まってから一発の致命弾も受けていない。

ただ一発の命中弾を左舷に受けたことがあったが、不発であり、艦の皆は大きくその身を揺らせる長門の強運に感謝した。

一トンものその砲弾は長門の重厚な装甲に弾かれ、虚しく海中へ没したようだ。

ビッグセブン、七巨艦と称され当時世界最強と目される戦艦に、長門は姉妹艦陸奥と共に列せられている。

大艦巨砲主義の大建艦時代に生まれたその艦は世界初の40cm砲を搭載し、二十年以上もの長い間日本の軍艦の頂点に君臨し続けた。

彼女ら日本の守護女神は、その身体をもって幾多の情勢緊迫から日本を護り、戦前の長い間の国威の象徴であったのだ。

沈黙の巨砲…当時火を吹くことのなかったその主砲は、今苛烈なる猛攻を加えている。かつては威光をもって日本を護り、今はその威力をもって日本を護るために戦っている。

しかして、それは本当に正しい判断だったのだろうか。

一瞬の迷いを直ぐさま三川は振り払う。

私は軍人としても迷わないと決意したではないか！

騒がしい艦橋内で唯一整然と立ち尽くしていた三川の胸の中には、何とも言えない不快感が立ち込めた。

ズドン……

轟音が響き細かな振動が艦を震わせる。

艦は再びゆっくりと揺れ、また同じ位置へと戻っていった。

「航空隊がよくやってくれたようだ。陸からの砲撃が大分少ない。

」

沈んだ気持ちを持ち直し、三川が呟いた。

「主砲命中……敵陸上砲台完全沈黙です。」

砲撃観測の報告を受けた砲術長が三川に伝えた。

これで戦艦への脅威はなくなった。

三川はそう思った。

陸上の大砲台群は文字通り壊滅し、停泊中の戦艦は火炎を天に押し、艦砲射撃どころではない。

近海を哨戒中であろう駆逐艦は脅威にはそれこそならなかった。

「軍設備を徹底的に破壊する。引き上げ予定まで後少しだ。諸君ここが正念場だ。」

「はっ！」

三川は静かに、そして確かに聞こえるように言った。

その場の皆はそれに呼応し、より一層熱を帯びる。

一方的な艦砲射撃がここから約一時間行われることになる。

長く感じるか短く感じるか……

諸陣営の将兵はその一時間をどう感じるのだろうか。

真珠湾が燃えている。いや、湾内どころではない。

この島のいたるところで火の手があがっている。

マツキンリーはその様子をただただ見渡していた。港に停泊していた戦艦は見る影もなく、あるものは火の手をあげ、あるものはその船殻を海上へ晒していた。

戦艦テネシーは左舷に大傾斜し、艦上は煙に包まれている。否、包まれる構造物などない。

上甲板は艦橋、煙突その他諸々の鉄塊とともに吹き飛ばされ、その黒煙と天を冲する火炎は艦内より湧き出していたのだ。

ついさつきまで機銃を乱射し、その大火砲を猛射していたテネシーを、ただの浮き船へと成さしめたのは他でもない、長門だった。

先の空襲で片舷に魚雷を喰らい、テネシーは傾斜を生じていた。しかしその果敢な応戦はやむことはなく、寧ろ激しくなっていた。

上部には弾薬が次々運び込まれ、次々と空へ打ち上げられていく。もしそこが夜であったなら、その闇夜に美しい華々が残酷に彩っていたことだろう。

しかしその創造主も終わりを迎えることになった。

ちょうど主砲弾の装填が完了したところであった。高高度より飛来した一トン砲弾が彼女目掛けて突っ込んできたのだ。

その数三つ、一つは巨大な水柱を立てながら海中へ没した。艦上の水兵は水飛沫に顔を歪め、銃座に手を掛けた。

しかしその瞬間艦は爆風と火炎に包まれた。一発はテネシーの第一砲塔に命中し、そのドームを押し潰し炸裂した。

装填されていた砲弾は悲しくもそれに誘爆し、甲板をえぐる。脆くなった甲板、それはもう艦を守る役目を果たせなくなっていた。

最後の弾がテネシーに命中した。

それは上甲板を貫き、内部に達する。

轟音とともに砲弾は炸裂するが、それだけでは終わらない。上部船倉をも貫いたそれが炸裂したのは弾薬庫であったがための出来事である。

巨大な爆発は隔壁を引き裂き、その火炎と爆風が艦内を襲ったのだ。第二、第三と爆発は連鎖し、エネルギーはそのほけ口を求め、天に救いを求めるが如く、上部建造物を吹き飛ばしたのであった。転覆し船底を晒すか、着底しその悲劇的な大口から海水を流し込むかは時間の問題だろう。

陸上施設など言うまでもない。

幾多の砲弾が滑走路に撃ち込まれ、格納庫は焼け落ち、使い物にならなくなっていた。

弾薬庫は文字通り消え去り、吹き飛んでいる。

それでもなお、遙か彼方よりあの悪魔の如き砲弾は飛んできた。

もはや破壊する物など無いのに湾を揺らし、轟音を鳴らした。

「……」

声もださず、マッキンリーは微笑した。

本当なら自分もあの場に赴いて仲間と一緒に抵抗するのだろうが、そんな気など起きなかった。

そしてそんな自分に不快感を覚えた。

何時もは心地よかった潮風がこの時ばかりは自身の心を逆なでする。

また爆発音が響いた。

ドーンという音が耳の深部にまで届く。

湾外に退避しようと思死の逃走を凶っていた軽巡洋艦が餌食となつたようだ。

真ん中から断絶された船体は艦首を天に掲げながら、ずぶずぶと海中へ没した。

マッキンリーはゆっくりと腰を下ろす。

頭を垂れると、やつれたその顔は病人のようになっていた。

たった数時間の出来事が彼の顔から血の気を奪い、目からは光を奪った。

心はそれ以上にふさいであり、黒い物で一杯になっていた。

怒り、憎しみ、悲しみ……

幾重にも折り重なった負の念がマッキンリーの心を飲み込んでいた

のだ。

何故こんなことになったのだろうか。

ふと彼の脳裏には素朴な疑問が浮かび上がった。

アメリカ太平洋艦隊は無惨な姿を晒し、以前の面影はかけらもなくなっている。

イギリスを差し置き、今では我がアメリカ海軍は世界一といってもよい海軍力を誇っていた。

かつては二流、いや三流程度の軍事力しかなかった我が国は技術を盗み、高め、先の大戦での英国の没落後、ついに玉座に腰を落ち着けることができたのだ。

自分もそんな軍に憧れを抱き、期待を胸に入隊をした。

最初に戦艦コロラドを見た時は感動したものだ。

世界に誇る戦艦コロラド……

ビックセブンの一隻でその名は戦艦メリーランド、ウエスト・バージニアの三隻とともに世界に轟いている。

そんな我が軍が負けるはずはない！

今まで混沌としていた彼の心境が激しくうごめきだした。

何故あの東洋の島国に負けねばならない！

我がアメリカ海軍は一番でなければならぬのだ！

目には光が宿り、その眼光は鋭く力強く瞬いていた。

顔は紅潮し、次第に息遣いが荒くなつてゆく。

ぱつとマツキンリーは立ち上がった。

砲撃はもう止んでいる。

憎き敵艦ももうこの近海から引き揚げている最中だろう。

彼は走りだした。

岬の坂を猛スピードで下つていく。

土を跳ね飛ばし、ちぎれた長草が浮きあがった。

この出来事を忘れてはいけない。

我らを辱めたこの屈辱を！

「リメンバーパールハーバー！」

マッキンリーの叫びは潮風に乗り、青空に拡散していった。

リメンパーパールハーバー（後書き）

あけましておめでとうございます。

並びに投稿遅延申し訳ありませんでした。

題名が決まらず苦勞してました。

なんだかこれもしっくり来ない気がします（汗）

内容も何だかぐちゃぐちゃになってしまいましたので出来ればアドバースをお願いします。

これは結構本気をお願いします（笑）

さて、ビックセブンといえば当時最強のラベルですよ？

長門、陸奥も含まれますが、この二艦は他よりも抜きん出ていたように思います。

主砲は世界唯一の40cm砲を搭載し、約25ノットの足はコロラド型よりも4ノット速いことになります。

艦自体もこれといった欠点もなく、逆流煙以外は優秀なそれこそ名艦の名に恥じぬものであるでしょう。

戦前の逸話は沢山あり、非常に興味深い歴史もあります。

大和ができるまでの旗艦でしたしね。

何だか取り留めもない話になってしまいました。

では今年も良い年でありますように。

失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6635i/>

大艦巨砲戦争

2010年10月8日14時36分発行